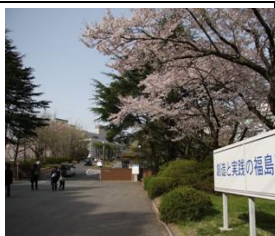
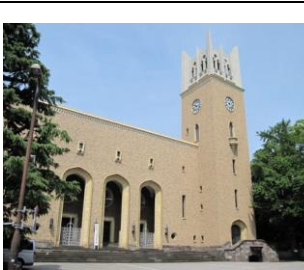


学生とシニアの対話 in 全国複数大 2021 報告(全体)

日本原子力学会シニアネットワーク連絡会 (SNW) 矢野 隆

			
福島高専（正門付近）	東大（赤門）	早大	東工大
			
東京都市大	豊橋技科大	京大	九大

昨年度（2020 年度）まで関東複数大対話会と呼称していたが、日本原子力学会 学生連絡会からのネット募集に応じて全国からの学生参加があることから、今年度より全国複数大対話会と改称し実施した。コロナ禍の影響で、今年度もオンライン開催となった。

今年度は参加学生の一部が幌延の深地層研究センターの見学を予定しており、その事前勉強会を兼ねて開催された。基調講演とグループ対話は、高レベル放射性廃棄物の地層処分にに関するテーマに絞って行なわれた。

対話後の学生アンケートに、とても面白い議論ができ参加して良かった、予想以上に視点が豊かになったなどの感想が述べられており、シニアの知識や経験が若い世代への良い道しるべとなっていると感じられ、今後の励みとなった。

本報告の構成（目次）

1. 対話会の概要	2
2. 対話会	4
3. 参加シニアの感想	8
4. 閉会挨拶	14
5. 学生アンケートの集計結果	14
6. 別添資料リスト	15

1. 対話会の概要

1) 幌延の深地層研究センター見学の事前勉強会を兼ねた対話会であり、高レベル放射性廃棄物の地層処分に関連するテーマを選んで参加学生とシニアの対話を行なった。

- ・今年度も、日本原子力学会の学生連絡会がネットで募集した参加学生と、ZOOMによるオンライン対話を行なった。
- ・ネット対話ということもあり、参加学生は東京、福島、愛知、京都、福岡など、全国から集まった。
- ・基調講演テーマは、深地層処分研究施設の見学を控えているため、高レベル放射性廃棄物の地層処分にに関するものとした。
- ・基調講演の講師は、昨年度好評を博した坪谷様に再度登壇戴いた。
参加学生も昨年度から一新されており、基調講演内容は昨年度好評だったものに国内外の最新の動きを反映した内容とした。
- ・対話テーマも高レベル放射性廃棄物の地層処分にに関するものに限定し、昨年度のグループ対話で挙げた“今後対話したいテーマ”などを参考に、学生連絡会とシニア世話役にて相談の上、次の4つのテーマを選択した。
テーマ1：地層処分にに関する情報発信をどう工夫すれば市民の理解を得やすくなるか
テーマ2：海産物や農産物への風評被害の影響及びその対策についての考察
テーマ3：地層処分にに関する新技術と、その応用や現場での適用に関する議論
テーマ4：自分の市町村が候補地に立候補した場合、自分ならどう対応するか
- ・グループ対話のファシリテータは例年通り、学生連絡会の学生が務めた。
- ・また、ネット対話の準備と当日の ZOOM 操作・管理に関しては昨年と同様に、「地層処分事業の理解に向けた選択型学習支援事業」の一環で、原子力文化財団が務めた。但し、昨年度はコロナ禍の状況にあったため、現地見学は最初から計画されなかった。
- ・参加シニアは、基調講演の実施とグループ対話でのアドバイスにとどめた。
- ・参加シニアの感想や学生アンケート結果などを見ると、学生ファシリテータによるしっかりとした司会進行、原文財団による的確な ZOOM 管理、および豊富な知識と経験を有する参加シニアからの発言により、実のある対話が生まれ、シニアの深い知識と経験を、上手く参加学生に伝えることができたと思う。

2) 日 時

- ・ 10 月 18 日（月）基調講演資料を学生連絡会および参加シニアへ送付
- ・ 10 月 30 日（土）13:00～16:00 基調講演およびグループ対話の実施

3) 場 所

- ・ ZOOM によるオンライン開催

4) 参加者

- ・ 原子力文化財団：2 名
真壁副部長、清水
- ・ 学 生：14 名
早大(2 名)、東工大(2 名)、東大(1 名)、東京都市大(1 名)、
福島高専(1 名)、豊橋技科大(1 名)、京大(3 名)、九大(3 名)
- ・ シニア：13 名
坪谷隆夫、松永一郎、西郷正雄、植田脩三、川合將義、大野崇、
岡本弘信、湯佐泰久、小須田紘一、武田精悦、船橋俊博、三谷信次、
矢野隆

5) 10 月 30 日（土）の対話会スケジュール

- | | |
|-------------|---|
| 13:00～13:10 | 司会と開会挨拶（学生連絡会） |
| 13:10～14:20 | 基調講演（坪谷）：演題「放射性廃棄物の地層処分の現状と
今後の見通しについて」
基調講演冒頭に坪谷 SNW 会長より、SNW の概要を紹介 |
| 14:20～15:30 | 対話（4 グループに分けたグループ対話）
Gr1(坪谷・松永・西郷・植田)、Gr2(川合・大野・岡本)、
Gr3(湯佐・矢野・小須田)、Gr4(武田・船橋・三谷) |
| 15:30～15:50 | 対話成果のグループ発表と質疑 |
| 15:50～15:55 | 原文財団からの連絡事項 |
| 15:55～16:00 | 閉会挨拶（大野） |

6) SNW の紹介

基調講演に先立ち、基調講演者でもある坪谷 SNW 会長より、日本原子力学会シニアネットワーク連絡会の活動概要について、スライドを用いた簡単な紹介を行なった。

7) 講演

- ・講演者名：坪谷 隆夫
- ・講演題目：放射性廃棄物の地層処分の現状と今後の見通しについて
- ・講演概要：本年度の全国複数大対話会は、原子力機構幌延深地層研究センターの見学に先立つ地層処分に関わる勉強会とのことです。その趣旨に沿うよう基調講演は、DVD「今から始めなきゃ！核のゴミ処分 マジ討論～20代の私たちが考えたこと～」(NUMO 制作、30 分) およびその DVD を補足するためのスライド「高レベル放射性廃棄物対策」(SNW 制作、30 分) としました。参加者が 20 代の学生と同世代の若者が出演し、これまでも共感を呼んだ内容の DVD を活用し、グループ対話における意見交換を盛り上げることを試みました。この対話会の直前に実施された寿都町長選挙の状況を参加学生が勉強していたようで、選挙における地域住民の態度、北海道民と首都圏住民の情報量の違いなどを問われました。

2. 対話会

(1) グループ1 (報告者：西郷 正雄)

1) 参加者

- ・学生：東工大 D3 (ファシリテータ)、豊橋技科大 B3、九大 M2、京大 B3
- ・シニア：坪谷 隆夫、松永 一郎、植田 脩三、西郷 正雄

2) 主な対話内容

- ・グループ1のテーマ：地層処分にに関する情報発信をどう工夫すれば市民の理解を得やすくなるか
- ・ファシリテータから、議論の的を絞るために、学生に対してターゲットをどこに置くかなどの意見を求めた。
 - ① 誰を対象にするか？
 - ② どのような内容ですか？
 - ③ どのような方法ですか？
 - ④ 発信した結果をどう評価するか
- ・その結果、文献調査の行われている2町村（神恵内村、寿都町）に関して、「市民の理解を得るための情報発信の工夫」について、意見交換した。これらの内容は文献調査に応募する自治体を増やすという視点からも有用である。
 - ① 市民の理解を得るための情報発信としては、対話会をできるだけ多く開催することである。
 - ② 対話会に参加していなかった無関心者や反対者も何度も開催されるといずれ参加することになり、市民への理解を増すことができる。
 - ③ 若年層の理解促進が大きな課題であるため、国や NUMO の事業として日本原子力学会の学生連絡会なども現地の若者や学生などと対話会などを実施すると良い。
 - ④ メディア特に報道量の多い北海道新聞が、この問題をどう捉えてきた

かを分析し、学会の学生連絡会なども現地の若者や学生など対話し、対話会の情報提供（どんな情報をどのように）に生かすことが大切である。

⑤ 「北海道における特定放射性廃棄物に関する条例」を持つ北海道を初め周辺自治体との情報共有が大事である。

⑥ 「市民（地域の方々）においては、技術に対する信頼（confidence）以上に国や NUMO に信頼（trust）し得るものを求めている」との発言があった。

・ 学生が中心になって意見交換が行われ、シニアが途中でコメントを入れるといった形式で有意義な意見交換ができた。

（2）グループ2 （報告者：大野 崇）

1) 参加者

- ・ 学 生：京大 M1(ファシリテータ)、東工大 M2、東大 D2
- ・ シニア：川合将義、岡本弘信、大野 崇

2) 主な対話内容

・ グループ2のテーマ：海産物や農産物への風評被害の影響及びその対策についての考察

・ 学生側がファシリテータを務め、風評被害の例、風評被害は何故起こるのか、具体的対策について話し合った。

① 風評被害とは何か（例）

奇形が生じたときに放射能のせいとされる、
農作物が売れなくなる、
陸前高田市の唯一残った松を京都の大文字焼きで燃やそうとしたときの反対

② 風評被害の対策でどういうことがなされ、どうしたらよいか

農家が福島事故当時に実施したことを考える、
農家は除染を試み、放射能のデータを自分で測定し、市場に持って行った、
現地の情報を SNS で発信、現地へ行く、
データによる事実の確立、
30 代、40 代といった若い人が直接現地へ行く（関心を持って）、
一般人の原子力の知識が少ない、
まず地元の人に海産物へ影響を考えてもらう→そこから広がっていく、
遠い人にも関心を持ってもらうような見学会を実施、
日本の基準はどう思うか？海外に比べて非常に低い、
政府もおかしい基準について実際の人体影響を国民に教えるのでなく
海外との比較も取り入れる

③ 有効な対策は

サイエンスコミュニケーターの存在が重要、科学館等の場所を設ける、
専門家とサイエンスコミュニケーターのコミュニケーションも大切、
一般人同士のコミュニケーションが特に大事（専門家と一般人との話

し合いは難しい)、
専門家と一般人との間にクッションが必要、
バナナにスマホを向けると放射能が見られるアプリの開発、
放射線のリスクだけが見られる、放射線の良さも考える(コントロール
して使っている事実を周知する)、
基準値の見直しを実施する、
ベストミックスを考える

(3) グループ3 (報告者: 矢野 隆)

1) 参加者

- ・学 生: 京大 B4 (ファシリテータ)、都市大 B3、福島高専 (B4 相当)、早大 B4
- ・シニア: 湯佐 泰久、小須田 紘一、矢野 隆

2) 主な対話内容

- ・グループ 3 のテーマ: 地層処分にに関する新技術と、その応用や現場での適用
に関する議論
- ・実際の対話テーマは「地層処分に求められる技術とその開発」と捉え、今後必
要とされる新技術などに関する対話を行なった。
- ・対話により得られた相互理解は、概ね学生発表(箇条書き)で述べられた通り
であるが、補足説明を含め、対話結果を以下に示す。
 - ① 深部の地質環境調査、すなわち、深地層の研究所で得られた知見や既存の地質文献
や地表からの地質調査による知見の拡充が望ましい。
 - ② (千年・万年単位の) 長期的な安定性を確保するためには、自然界で既に安
定しているもの(例えば、ガラス、金属、ベントナイトなど)が人工バリア材として選
択された経緯がある。新素材についても長期的な安定性の確証が求められる。
 - ③ 安全の保障(安全評価)
地層処分システムは多重バリアシステムという複合系の条件であり、保守的
な評価を行なう場合がある。例えば、実験室スケールでの時間経過(移行速
度)などを処分システム全体の安全評価に用いる場合には、その実験値より
保守的な値を用いる場合がある。
具体的には、NUMO のシナリオ(包括的技術報告書ベース)で述べると、
 - 人工バリア材であるオーバーパック^{注記}の機能保持期間は保守的に千年間
とする、
 - 千年後、オーバーパックの保持機能がなくなり、ガラス固化体が地下水と直
に接する、
 - (その後、) 徐々に地下水に溶けだす、としている。オーバーパックが千年で壊れるという想定はかなり短い期間想定であり、安
全性を説明するために、実際よりも保守的な評価をしている。

注記:PPT や口頭でキャニスターが評価上、千年で壊れると説明したが、これは、キャニスターではなく、オーバーパックであるため、訂正した。

④ 安全性についての伝え方

安全性に関連する長期の安定性についてのシミュレーションを説明するには何を模しているかを伝えることが重要。保守的な安全評価をしている場合、過度に保守的にしすぎると違和感が生じる場合がある。

⑤ 理解の醸成

関心の有無や世代に応じた情報量と回数、身近な例、体感が必要だ。「直感的に伝わりやすく」、「身近な例で説明する」、「信憑性のある」技術開発が必要であろう。

(4) グループ4 (報告者:船橋 俊博)

1) 参加者

- ・ 学 生:九大 M1 (ファシリテータ)、早大 M1、九大 D1 ; 計 3 名
- ・ シニア:武田 精悦、船橋 俊博、三谷 信次

2) 主な対話内容

グループ4対話テーマ:自分の市町村が候補地に立候補した場合、自分ならどう対応するか

学生側がファシリテータを務め、テーマに従い以下の内容が話し合われた。

① 前提確認:「自分の住む場所」とは？

最終処分場としての条件を満たしている地方自治体を想定、文献調査の候補地として立候補した段階を考える。

② 現状分析(意見の相違箇所の特定)

賛成派・反対派に二分される可能性大である。

賛成派にとっての意見

- ・ 補助金 (地方創生の為の一手に) に期待できる。
- ・ 政府や技術者への信頼に基づいて十分に安全と判断出来る。

反対派にとっての意見

- ・ 説明が不足している。
- ・ 安全面での不安が拭えない。
- ・ なぜ自分の町で無ければならないのか判らない。
- ・ これまで培ってきた地域のブランド力を毀損する。

③ 対応案

- ・ 補助金の使い方を上手く説明する。
- ・ 地層処分場を誘致した後の町の発展について説明する。
- ・ 安全性に関する地道な広報活動をする。

- ・全国的な広報活動も行う（地層処分への理解を深める）。
- ・文献調査とは何するのか、詳しい内容を開示する。
- ・「反対・賛成どちらでも無い層」をどう説得できるかが重要。

3. 参加シニアの感想

（坪谷隆夫）

グループ対話は、グループ1（参加学生4名）に入りましたが、配属された学生は関東、中京、関西、九州とオンラインならではのバラエティに富んでいましたが、いずれも理系で、これまでに六ヶ所や幌延を見学していた学生もあり、ファシリテータ役（D3）の力量の高さもあり、学生諸君の関心事項とシニア（松永・西郷・植田・坪谷）のコメントが良くかみ合っていたことがグループ報告からも覗えました。グループ対話から学生連絡会の若者が地層処分を学ぼうとする地域の若者と対話を持てるよう国・NUMO が企画する重要性や「技術に対する信頼（confidence）はもとより国やNUMO の信頼（trust）が地域における対話を成功に導く鍵」との発言が得られたことは大変嬉しく思いました。

（松永一郎）

以前はよく参加していた「学生連絡会メンバー主体の複数大学対話」に久しぶりに参加した。対面对話では参加することができない九州、京都、豊橋、東京、福島 of 学生が地元から参加できるのは ZOOM 対話なら可能であり、その良い面を改めて実感した。

対話のテーマは「地層処分に関する情報発信をどう“工夫”すれば市民の理解を得えやすくなるか？」であった。ファシリテータを学生連絡会の D3 の学生が務めた。そのため、学生からの意見の引き出し方がうまく、通常の対話会（シニアがファシリテータ）では多くなりがちなシニアからの発言を上手くコントロールできたと思う。

学生からの意見を聞いていると、「地層処分」は観念的には理解しているが「自分が地元住民だったら」あるいは「自分が説明する立場だったら」と具体的に想像力を膨らませて考えることが苦手であることが分かった。対話を進めていくうちに次第に本人たちも自分の頭で考えるようになってきた。これが対話の良いところだと改めて認識した。

結果として、学生連絡会員が「できれば自分たちが地元に行って若手の住民と対話できれば」というところまで話が進んだ。NUMO あるいは原文財がそのような意向を汲んで、地元へ派遣をするということも一つのアイデアかと思う。

最後に ZOOM 対話をスムーズに進めていただいた原文財の清水様に御礼申し上げます。

（西郷正雄）

この度の全国複数大対話会は、リモート対話なので、誰もが自宅より参加できたものと思う。場所の異なる学生たちが、一つの場所に集まることを考えれば、往復の時間を節約できるので悪くないと感じた。特に私のような杖突の身には大変助かった。ただ、皆さんとの顔を合わせた懇談ができないために、更なる突っ込んだ会話の時間を持てないのが残念であった。

対話は、ファシリテータの段取りがしっかりしていたので、皆がスムーズに議論に溶け込めたと思う。ただ、時間的に短いために、いろいろな意見交換をするのには、物足りなかった。特に、ターゲットを既に声を上げている候補地に絞ったのは良いが「市民が、事業者や国に対して、信頼をもって接しているのか?」、「市民が事業者や国に疑問点を持ちながら接していないか?」などといった根本的なところの意見交換としては、最初のターゲットを決める段階に、「信頼を得るのには、」という点で、簡単に話し合うことで終わってしまった。しかし、NUMO が候補地での「対話会を多く実施すること」で、「いずれは、無関心者や反対者も対話会に参加することとなり、多くの市民が理解を深めることになるだろう。」との結論となったのは、良かったと思う。

最も大切な信頼を確保するのに「NUMO の誠実な行動を対話会を多く実施すること」により示し、その中での「対話で誠実な態度を示すこと」が可能となるので、良かったと思う。

また、実施体の NUMO にだけ任せるのではなく、自分たち学生も対話会を企画し、後方支援することについても話し合うことができたことは、「若者間の対話会を実現できるので、一般的に言われている無関心層の若者に目を向けることができ」、非常に良かったと思う。

その際には、SNW から参加できれば、原子力の専門的な経験を若者に伝えることができるので、市民（候補地住民）は、原子力の意義を理解した上での高レベル放射性廃棄物処分への参画となり、より有意義な対話会になるものと思います。

（植田脩三）

グループ 1 の対話は、「「地層処分に関する情報発信をどう工夫すれば市民の理解を得やすくなるか」というテーマで学生側のファシリテータのもとで開始された。ファシリテータの方にはお会いしたことがあり、また、シニアの方もほぼ知っていた方々なのでスムーズに会議に参加することができたと思っている。

グループ 1 のテーマは、非常に重要で、これから私自身も取り組むべきテーマと感じた。若い学生の方が、寿都町や神恵内村の方と対話会を開催し、意見交換ができると住民の方の理解も深めることができる。NUMO や国は、その支援をすべきとの結論だったと思う。

11/6(土)付、北海道ニュース UHB、UHB 北海道文化放送のニュースによれば、「高レベル放射性廃棄物の処分場選定に向けた文献調査に応募している後志の寿都町を福島県の高校生や大学生が訪れ、片岡春雄町長と意見を交わしました。」

とのことである。寿都町を訪れたのは福島県の高校生や大学生など 21 人だとのことである。グループ 1 の議論は時宜にあった結論だったと改めて感じた次第である。

(川合將義)

今回は、ZOOM の取り扱いは、原子力文化財団の清水さんが操作されたことと、ファシリテータ役の学生が、テキパキと議論を進めたので、短時間ながら議論がまとまった。もっとも、議論の進め方は、どのグループもほぼ同じに感じた。

福島への風評被害について学生がどのように認識しているかを知りたくてオブザーバー参加したので、発言をできるだけ控えようとしていた。しかし、学生は、福島食品に対する風評被害と言うと、「汚染されていなくても購入しないこと」と言うような固定観念に取り憑かれているように感じたので、農地除染や土壌改良によって農産物の汚染が減り、また、JA が中心となって汚染検査して基準超えのないこと、さらに測定下限以下のものが増えたことで、福島産食品を忌避する人が減った、桃や米については福島産の物の品質は他産地の物に比べて劣っていないが、市場で値付けする人が売れ行きを心配して全国平均の値段より低くしていることを伝えた。また、海外の輸入規制のきっかけとなった汚染食品に対する世界一厳しい基準決定の経緯等を説明した。そのことで、風評への対応の議論が真っ当なものになったと思われた。結果、放射線のことを一般の人へ伝えることの難しさが認識され、サイエンスコミュニケーターを介在させることやバナナに翳したら放射性物質がどれだけあるかを表示すると言ったアプリの提案が出た。さらに、現地を知らないことが風評の一番の原因であり、交流することの重要性が指摘された等々。アプリの提案に現代っ子だなと感心した。

食品の基準値の見直しの意見も出たが、福島人は、基準を完全にクリアできたことで、その基準が継続されることを望んでいること、汚染検査を未だ続ける福島県人の実直さを伝えた。なお、風評被害の例として、震災のあった年の夏に陸前高田の松を京都五山の太文字焼きに焼べて震災の犠牲者の霊を弔う話があったが、放射能汚染の恐れがあるということで実現に至らなかったことも話したが、(東京の) 学生のメモには、「松が燃やされてしまう」と記されていて、ここでも正しく伝えることの難しさを感じた。

今回の対話会をもとに学生が福島のことを周囲の人に伝えてくれる雰囲気できたこともあり、「福島風評問題」を資料にまとめて学生代表の大迫君に送付した。

(大野崇)

全国複数大学対話会として、NUMO 研修事業の幌延地層処分施設見学の事前勉強会にリモートで参加した。まず、事前のリハーサルから当日の勉強会にわたり周到なご準備いただいた日本文化財団事務方の清水様、真壁様並びに SNW の世

話役を務めた矢野様に感謝申し上げます。

対話会は、学生連絡会から東工大、豊橋技術大、九大、京都大、東大、都市大、福島高専、早稲田との修士課程並びに、博士課程の学生が参加し、皆問題意識を共有し中身の濃い対話が成立したと思います。私が属したグループ2は京大修士課程、東工大博士課程、東大博士課程の3名と風評被害について議論しました。学生側がファシリテータを務め、風評被害の例、風評被害は何故起こるのか、具体的対策について話し合った。

サイエンスコミュニケータの重要性、専門家と一般の人との垣根をどうするか、食品の合理的な基準値の見直し、放射線のリスクだけでなく良さも合わせた正しい知識が伝わっていない等ポイントを衝いた深掘した活発な議論がなされた。

最後に、再エネ万能、脱原子力の風潮に対し意見を聞いた。ベストミックスが安定エネルギー供給の原点との回答に、次の世帯への伝承の担い手としての頼もしさを感じた。

(岡本弘信)

対面の対話会に実績のあるシニアネットワークがコロナ禍によってリモート対話となったことにより、全国複数大学生との対話ができことは今後の学習啓蒙活動を広めるのに意義あることであったと思う。地層処分を紹介するDVDと内容の濃い基調講演から始まり、地層処分とは何か、海外も取り組んでいる状況と課題、事業を進める上でのコンセンサスの重要性などを、改めて認識できたことでしょう。

第2グループでは海産物や農産物への風評被害について話し合い、どんな風評被害があるか、どのような対策ができるのか・して欲しいのか、専門家と一般人とのコミュニケーションはどう進めるのかなどについて意見交換できた。福島の除染事業推進に携わったシニアの経験の一端が紹介されて風評問題の実際を聞くことができ、地層処分計画推進の途上で起こりうる風評を考える一助になったのではと期待します。

時間の制約からあまり話に出なかったが、国、自治体と住民、事業者が取り組むべき風評対策にはそれぞれ何があるかは大きな課題なので、時間をかけて取り組む必要があり、学生諸君の貢献を期待しています。

(湯佐泰久)

ファシリテータは学部4年生の学生で、きわめて適切な進行振りであった。多くの発言はファシリテータの指示によりなされ、今、議論しているテーマから外れることは殆どなかった。シニアもその指示に協力し、簡潔な発言に終始してい

た。参加メンバーの学生もテーマに沿って発言していた。

テーマについては「新技術」という表現は幅広いので、参加者の学生からもう少し、絞った意見を聴いた方が良かったのかもしれない。

4名の学生は熱心で好感が持てた。時間があれば、さらに多岐にわたるテーマについても意見交換したいと感じた。

（小須田紘一）

○Gr 3の学生は「原子力」に取り組もうとしている、あるいは取り組んでいる現役でもあり、知識の吸収意欲はあるであろうが、見学に積極的なことは研究・実験・実機に触れていきたいという願望があると思われた。

○ファシリテータの学生は、参加メンバーに、対話内容をすぐさま視覚化して簡潔なメモを配布するなど、手際のよいスピード感があつた。

○若者には「楽しい」というキーワードは大きな比重がありそうなので、「議論が楽しい」ということでもよいであろうから、更なる活性化のために、記録の残る対話会の後に、オフレコードの「懇親・談話」は有効と思う。

○シニアはZOOMでの名前の変更や共有という簡単な操作は、ホストに助けられなくてもスムーズにできるようになっていた。

○対話会に参加したことで、勉強会ということではあるが、シニアには、学生に伝えたいこと、学生からも学ぶことがあると認識した。

（矢野隆）

昨年度に引き続きWeb・リモート方式（ZOOM使用）の全国複数大対話会（但し、前年度までは関東複数大対話会と称していた）に世話役として参加しました。この対話会は、日本原子力学会 学生連絡会主催の「地層処分オンライン勉強会」（幌延見学の事前勉強会）を兼ねており、原子力文化財団の支援を受けて実施されました。全体の司会・進行は学生連絡会等の慣れた学生が務め、ZOOMの準備と当日の管理・操作は原文財団が行ない、そして、シニアは基調講演に加えて、グループ対話の場において適切なアドバイスを行ないました。

基調講演などの全体会合や所属したグループ3の対話から私が感じたのは、ZOOM対応に不慣れなシニアに対して原文財団より上手にサポートして戴けたこと、およびグループ対話の場で学生ファシリテータよりの確な対話進行を受けたことです。お陰様で、プレッシャーなくZOOM対話に集中できたし、対話の場でシニアの意見を的確に伝えることができました。

当日会社に出社され、ご対応いただいた原文財団の方々や学生連絡会を含む参加学生の皆さんに感謝申し上げます。また、本対話会は他の対話会と違って大学の先生なしで実施されており、細かい事前調整に付き合っていたいただいた原文財団の清水さんと学生連絡会の大迫さんに有り難うと申し上げます。

（武田精悦）

参加された学生の方々のテーマに対する意識は高く、十分に準備されたうえで議論に臨まれていた。前提の確認、現状分析、対応案など議論の枠組みを明確にするのは無論のこと、北海道寿都町での町長選挙結果など最新の情報にも精通していた。議論の進行もスムーズに行われた。

議論の多くは反対派への対応、地域への交付金の提供、安全性の説明の重要性などこれまでに多くの場で議論されてきた内容を超えない範囲との印象だったが、逆に言えば、出席された学生の方々はそれだけ原子力・地層処分に関わる社会的状況をすでに十分把握しているものだと理解した。

また反対の立場からみれば地層処分以外の方法についても検討する必要があることが提案された。これも実際反対の方々からよく言われることであるが、この指摘は重要である。法律では地層処分の実施が明記されているにもかかわらず、まだ国民の少なからぬ方々が地層処分に納得していないか無関心であることも事実だからである。（つまりなぜ地層処分かを広く国民に説明していかなければならない。）

時間の制約からシニアとの議論は十分できない面はあったが、今後は、候補地を受け入れる地域での、賛成・反対どちらにも属さない、多くのいわゆる中間の方（この存在はシニアから指摘された）への対応、その地域での将来の発展のあり方や合意形成のあり方などについてさらなる議論の深化が望まれる。

（船橋俊博）

学生連絡会から参加の３名は、ズームを使ったWEB会に慣れており、スムーズに対話が行われた。具体的には、ファシリテータを連絡側にお願いしてあったが、事前に対話の道筋に沿って、前提確認、現状分析、対策、評価等の枠組みをパワーポイントで作成し、その枠内に対話内容を即時に入力し共有していた。発言内容の確認とあとの振り返りにも役立ち、有効であると感じた。

対話内容については、前段の前提確認で少し時間がかかったせいか、対処の手段の列記までとなり、自分なら如何するかの議論にあまり時間がとれなかった。参加者は皆さん熱心で、色々なアイデアが出そうな方々であったので少し残念な感があった。

（三谷信次）

グループ４の対話は、「自分の市町村が候補地に立候補した場合、自分ならどう対応するか」というテーマで学生側のファシリテータのもとで開始された。参加学生３名で、出身地は京都だったり、九州だったり議論の深めづらい様子、纏めるのに苦労していたようだ。テーマが普段の学習からは馴染みの薄い領

域なので、制限時間内での議論の収束が難しいように感じられた。テーマをせめて「自分の出身地が文献調査に立候補した寿都町や神恵内村であったとしたら、自分ならどう対応するか」というのであれば、直前の基調講演で少しは触れているので、具体的なイメージが沸いて対話の落とし所がはっきりしたようにも感じられた。このような難題にも係わらず学生のファシリテータの何とか纏め上げた技量とそれに協力した参加学生に心から敬意を表する次第である。

4. 閉会挨拶(対話会幹事:大野 崇)

- ・ 本日はどうもお疲れ様でした。
- ・ 皆さんは、「高レベル放射性廃棄物の地層処分問題」に関心を寄せ、これから幌延にある高レベル放射性廃棄物の地層処分施設の見学に行かれると伺っており、その事前勉強会に、私共シニアネットワーク連絡会が同席させていただき皆様と対話をする機会をいただきありがとうございました。
- ・ 我々も、半世紀前に原子力に足を踏み入れました。原子力は人類が手に入れた宝です。残念ながら、今は順風というわけには参りませんが、日本にとってもなくてはならない分野ですし、一生の生業にするに値するというのが私の信念です。
- ・ 今日は、皆様のしっかりした考えや意見をお聞きし、原子力の世代はつながっているのだということを実感し嬉しく思いました。
- ・ 本日は、日本原子力文化財団の清水敬子さんには ZOOM のご提供をはじめ運営にご支援を頂いたこと、学生連絡会の大迫氏並びに SNW の世話役の矢野隆氏の並々ならぬご尽力をいただいたことを記して感謝を申し上げます。

5. 学生アンケートの集計結果(矢野隆)

1) まとめと感想

学生連絡会からのネットによる参加募集であり、また、一部の学生は幌延見学ができるため、全国各地の大学・高専生の参加するオンライン対話会が実現した。参加学生はやはり、原子力推進の意見が多いようであり、地層処分に関する市民の理解を得るにはどうすべきか、風評被害への対策はどうすべきかなどの対話テーマに対して、一生懸命解決策を考える姿勢がうかがえた。14 名中 11 名から回答があったアンケート結果においても、アンケート第 8 項の日本のエネルギー政策を問う質問に対して、3 名が“原発の必要性を強く認識した。削減または撤退すべきでない”、8 名が“原発の必要性は分かっていたので、認識は変わらなかった”と回答しており、アンケート回答あった 11 名の全員が原発推進意見であった。

全員からのアンケート回答ではないため確かな比率は不明であるが、このような原発推進意見の多い対話の場では、原子力の諸問題の解決に向けた議論を進めて行くことで、妥当な解決策が得られる可能性が高くなるのでは、と感じた。

2) アンケート結果の詳細

対話会のアンケート結果の詳細を添付する。

6. 別添資料リスト

- ・講演資料：「高レベル放射性廃棄物対策」（坪谷隆夫）

（報告書作成：2021 年 11 月 12 日）